

# 備る

Vol. 165

とにかくつくる

山形浩生

ここ二〇年ほど、香港の隣にできた人工都市深圳シエンにずっと興味を持って通っていた。一九八〇年代末に初めて香港から国境を越えたときには、道路網だけが広がる果てしない荒地地だった。これは人工都市失敗事例がまた増えるかと意地悪な期待で通い続けていたら、訪れるたびに、あれよあれよと建物が増え、地下鉄ができ、香港からいかかわしい産業がどんどん移住してきては発展し、今やハードウェアのシリコンバレーと呼ばれるほどのすさまじい場所になっている。

エレクトロニクス、プラスチック製品、衣料、その他すべてで、粗悪コピー、三日で壊れる等々のぼろくそ罵倒状態

から、どんくさいが普通に使えるもの、さらには細かいニーズを見事に反映したおもしろい商品、そして胸を張って一流といえる水準にまで発展した。二〇〇〇年頃にある深圳メーカーのブログを見ていたら、「初めて基盤設計ソフトを使ってみたよ！」という頭痛ものところから、わずか半年で文句なしの設計水準に到達し、その後一年で基盤の少量受注生産からユニークなキットまで、かなり高度な商品やサービス提供を実現するようになったのには驚嘆した。

いまやそれが各種産業の全域で起きている。一九九〇年代の深圳で建設中の建物を見ると、垢抜けず安全面すら

怪しい代物ばかりだったのが、最先端の高層ビルが乱立し、空港や展示場、芸術地区などと有機的に連携した市街地開発や、年に地下鉄一本以上も開通するインフラ水準も東京など及びもつかない高水準だ。

で、ふりかえってみれば最近、日本ではものづくりが珍重されつつ、それがDNA云々とか変な精神論に墮している。でも深圳の発展を見ると、やはりものづくりは実際につくってなんぼだとひしひしと感じる。タマ数をこなして経験値を上げれば(そしてそこに競争が加われば)、急速にそこそこの、いや最高の水準に到達できる。

日本はその点、過去二〇年のデフレ



やまがた・ひろお

開発援助コンサルタント、評論家、翻訳家  
1964年生まれ。東京大学都市工学科修士課程およびMIT不動産センター修士課程修了。  
開発援助コンサルタントとして世界をまわったかわら、小説、経済、建築、ネット文化など広範な分野での翻訳および雑文書きに手を染める。  
著書に「新教養としてのコンピュータ」(アスキー)、『新教養主義宣言』(河出文庫)、『メイカーズのエコシステム』(共著、インプレスR&D)など。  
主な訳書にジェイクブズ『[新版]アメリカ大都市の死と生』(鹿島出版会)、クルーグマン『クルーグマン教授の経済入門』(河出文庫)、ロンボルグ『環境危機をあおってはいけない』(文藝春秋)、ピケティ『21世紀の資本』(みずす書房)ほか多数。

で、モノの需要は下がり、公共事業の減速で建築や土木は岐路に立たされ、その結果が人材難で疲弊する多くの現場と老朽化した脆弱なインフラだ。多くの場合、日本の精神論とブラック根性論ばかりのものづくり賛美は、「実際にとにかくつくる」らしいといういちばんの基本——そのために、とにかく買って発注する——から目をそらす口実になっている印象さえある。

その基本を実現する最高の方法というのには、まずは景気回復であり、そのためには消費増税中止と金融緩和と大規模公共投資、つまりアベノミクスの拡大強化版を数年以内にやることなんだが……。

創